特集　紛争地域から生まれた演劇 14

《特集　紛争地域から生まれた演劇 14》

14回目となる「紛争地域から生まれた演劇」シリーズ（『国際演劇年鑑』関連企画）では2022年12月９日から11日まで、プロトシアター（東京）にてウクライナの作家、ナタリア・ボロズビト（Natal'ya Vorozhbit）の戯曲『Bad Roads』のリーディング上演を予定していたが、公演関係者に新型コロナウィルス陽性者が確認されたため中止を余儀なくされた。その創作過程の一端を知るため、編集部では演出の生田みゆき氏より演出ノートをご寄稿いただいた。

〈演出ノート〉

「知っていること」を疑い「割り切れなさ」を伝える

生田 みゆき

「紛争地域から生まれた演劇」シリーズ14でウクライナの戯曲を紹介します、と発表した時の反響はとても大きかったように思う。2022年２月のロシアの軍事侵攻から約一年。ウクライナと、そこに暮らす人々に対する世間の興味の大きさを感じた。私自身、ある種の「期待感」を持って戯曲を読み始めた。そして冒頭からハッとさせられる……。

この戯曲の舞台は2014年のウクライナ東部のドンバス地域。今回の侵攻の８年前、そこには既に紛争があったのだ。たしかに当時クリミア併合のことが報道されていたことを思い出す。しかし、2022年２月の侵攻の際に、それがはっきりと頭にあった人がどれだけいただろうか。２月を境に大量の報道を浴びている私たちは、まるで突然侵攻が始まったかのように感じてしまっていたかもしれない。

そして戯曲を読み進めるうちに、また予想を裏切られる。私たちがつい期待してしまうようなこと――例えば連日報道されるようなロシアからの理不尽な攻撃に苦しむウクライナ人の姿――はほとんど描かれない。出てくるのは、例えば恋に夢中になる女性だ。

戯曲は６つのエピソードから構成され、女性の膨大なモノローグで始まる。作家の分身だと思われる女性は、一人の兵士と共にキーウを出発してウクライナ東部の前線を旅する。

女性の目を通じて前線基地の様子や戦いに巻き込まれた子供たちの様子は断片的に語られるが、彼女の一番の興味は一緒に旅する兵士にある。近くで人が死んでいく状況でよくそんな盲目的な恋ができるな、と呆れてしまうほど、彼女は彼への欲望を饒舌に語る。しかし強い愛国心とよく鍛えた身体を持ち、戦いの英雄である彼は、おそらく心的ストレスから勃起できない。兵士は女性にオーラルセックスを要求し、やがて二人の旅は終わる。

これに続く4つのエピソードは、この女性が旅先でちらっと目にした人物たちのサイドストーリーのような形で展開していく。そこでも私たちは混乱する。連日の報道で、私たちはロシア側が非難され、ウクライナ側の悲劇が強調されるのに慣れてしまっている。しかし戯曲の中では、ウクライナ兵士たちによる性的搾取や暴力についての描写も見られるし、ウクライナ東部に暮らす人々のアイデンティティも様々だ。ウクライナ兵のことを応援し、仕事で関わっている人もいれば、ロシアのテレビ番組を日常的に見ている家庭もある。そして「兄弟同士」で戦うことを憂いながらも、銃を向け合う兵士がいる。

ウクライナにおける親ロ派と親欧米派の対立については、特に最後のエピソードで非常に寓話的に描かれている。このエピソードのみ、時代は戦争前。老夫婦が飼育していた鶏を若い女性が車で轢(ひ)いてしまい、金銭で弁償しようと提案する。老夫婦ははじめ、彼女の申し出を冗談にさえ感じるが、若い女性が賠償金を差し出すと、何かと因縁をつけて、最終的には車まで差し出すように迫る。そこに近所の子どもの泣き声とその母親の声が聞こえ、老夫婦は悪夢から覚めたように若い女性を追い出す。「さっさと出て行け、私たちを誘惑するんじゃない」と。

私自身はこの最後の台詞を人間の欲望と、それを刺激する資本主義の暴力性に対する批判と受け取った。その土地でできる範囲のことで、つつましく暮らしてきた人々が、資本主義のより豊かな生活を見せつけられた時に、際限ない欲望を植え付けられ、それまで築き上げてきた生活はいとも簡単に破壊されてしまう。連日報道されているとはいえ、遠いところで起きていたこの紛争と、資本主義社会に暮らす自分との接点が生じた瞬間だった。

この戯曲をどう日本の客席に届けるか、座組で何度も言葉を検討した。よく報道で目にする題材だからこそ、自分の知っている範囲の構図に当てはめてしまいやすい。分かりにくいシチュエーションに言葉を付け足して明確にしようとする私に、翻訳の一川華(なな)さんが度々ストップをかけてくれた。作家がそこをはっきり書いていない「割り切れなさ」の重要性を一川さんが感じ取っていたからだろうと思う。

また、実際に苦しんでいる人たちの姿がテレビやネットで届けられる中で、これをどうリーディングで上演すべきか、俳優はどう演じるべきかについて、座組で慎重に議論を重ねた。これはもちろん他の作品にも言えることだが、私たちがどれだけ資料を読み、想像しても、分

かり切れない部分はたくさんある。それをあたかも分かったように演じるというのは良くないと思ったが、ただの棒読みでは、戯曲は伝わらない。リーディングという表現形式を活かし、客観的な視点をもちつつも登場人物にどこまで入り込むか……このバランスを探り続けた稽古だったと思う。

残念ながら今回は全公演中止となってしまったが、この戯曲を今上演することで、気付けることが多くあることを確信している。複雑な状況を安易に分かりやすくすることの危険性を肝に銘じつつ、いつかこの作品を客席に届けることができればと思う。

いくた・みゆき

演出家。文学座所属、演劇ユニット「理性的な変人たち」メンバー 。東京藝術大学大学院音楽研究科修士課程修了。 国際演劇協会日本センターの企画では、『これが戦争だ』（紛争地域から生まれた演劇10）『自殺の解剖』（ワールド・シアター・ラボ2021）を演出。近年の演出作品に『ガールズ・イン・クライシス』『オロイカソング』『建築家とアッシリア皇帝』など。

『紛争地域から生まれた演劇』シリーズについて

世界の国際演劇協会（ITI）では、演劇を通じて平和の構築を目指す取り組みとして「Theatre in Conflict Zones」と題するプロジェクトを行っています。日本センターでは、2009年より本誌『国際演劇年鑑』の調査・研究事業の一環として「紛争地域から生まれた演劇」シリーズを始めました。当シリーズではこれまで13年にわたり、日本国内でまだ知られていない優れた戯曲を28本、翻訳とリーディング上演、作家や専門家によるレクチャー、展示等を通して紹介してきました。3年目からは戯曲集の発行も行っています。『Viral Monologues』の翻訳を収録した最新刊やバックナンバーをご希望の場合は、国際演劇協会日本センターまでお問合せください。（編集部）

本年度の公演は、残念ながら中止になりましたが、実施できなかったリーディング公演の記録を以下に残します。

《記録》

紛争地域から生まれた演劇14

『Bad Roads』リーディング

※公演・配信ともに中止

2022年12月９日（金）～11日（日）

会場＝プロト・シアター

アーカイブ配信＝2022年12月６日（月）10時～2023年１月９日（月・祝）23時59分

作＝ナタリア・ボロズビト（Natal'ya Vorozhbit）

翻訳＝一川華

演出＝生田みゆき（文学座）

出演＝石村みか（てがみ座） 岩男海史 亀田佳明（文学座） 斉藤淳（劇団俳優座）
柴田美波（文学座） 寺田路恵（文学座） 西岡未央

総合プロデューサー＝林英樹

本誌『国際演劇年鑑2023』の別冊として、『Bad Roads』の翻訳および訳者解題を収めた『戯曲集』を発行しています。ご希望の場合は、国際演劇協会日本センターまでお問い合わせください。